

アフリカで治験参加 ハエ媒介感染症に「効果」

横須賀市の漢方薬メーカー

熱帯地域に多い感染症、リーシュマニア症の治療研究プロジェクトに、横須賀市の漢方薬メーカーの大草薬品(森崎)が参加する。同社が生産している漢方薬に効果があるとの研究が契機となった。早ければ5月にも、アフリカ東部エチオピアの研究機関で治験が始まる。

(高橋 融生)

同社は1933年に市内に構えた薬局が発祥で、現在は胃腸薬や便秘薬など50品目を生産し、医薬品専門商社などを通じて供給している。

リーシュマニア症はハエが媒介する原虫による感染症。皮膚が冒され、重症になると鼻が欠損する例もあり、世界保健機関(WHO)でも治療法の研究に注力している。長崎大学の研究チームが、和漢薬を活用したリーシュマニア症の研究に取り組んでおり、生葉のシコンから作られる軟こう「紫雲膏」に着目した。

紫雲膏は漢方外用薬で、ひびやあかぎれ、あせもなどに効能があるが、患部に塗りやすくするため、原料に豚の脂を原料としていることが多い。アフリカに多いイスラム教徒が使うのは宗教上難しいとみられてきたが、大草薬品の製品には豚脂が含まれておらず、現地での治験が可能と判断さ

れた。

今年初めに現地当局から治験の許可が下りた。長崎大と現地の医療研究機関の研究に向けて、同社は3月に製品と薬効確認用の偽薬を80セットずつ寄付した。5月にも治験が始まるとみられる。



大草薬品が生産している和漢薬「紫雲膏」

同社の主力製品は胃腸薬などで、紫雲膏の売り上げは少ない。大草薬品社長は「伝統のある薬品として、気概だけで生産してきたが、自分たちでも気付かない薬効があったことに驚いている。今回の貢献がブランド強化につながれば」と期待している。